

大特集「ソフトウェア製品生産管理」の編集にあたって

國井利恭[†] 齋藤信男^{††}
原田賢一^{†††} 大野尙郎^{††††}

情報処理技術の発達にともない、ソフトウェア産業においては、ソフトウェアからソフトウェア製品への質的転換が求められている。このためには、ソフトウェアの生産管理技術の確立とその導入とが必要である。

ソフトウェアの生産管理技術は、いわゆるソフトウェア工学の分野の中でその重要性を認識されながらも、未だ深く追求されていない分野である。我が国の工業の諸分野では、多くの優れた管理技術が導入され、その成長に対する確かな基盤となっている。ソフトウェア産業においても、その特質をふまえた独自の管理技術があるはずである。

本特集の企画は、昨年12月に開かれた第2回ソフトウェア工学シンポジウム「ソフトウェア製品生産管理」に基づき、会誌編集委員会からソフトウェア工学研究会に依頼されたものである。このシンポジウムは、第1回の「ソフトウェアツール」にひき続き、現在のソフトウェア工学の重要な課題をとりあげるという意図のもとに立案された。そこでは、次に示す6つのセッションがもたれ、10件の発表と1件のパネルディスカッションが行われた*。

- (1) ソフトウェアとソフトウェア製品
- (2) ソフトウェア ライフサイクル管理
- (3) ソフトウェア製品生産のコスト分析
- (4) ソフトウェア製品の品質保証
- (5) ソフトウェア製品のヒューマンファクタ
- (6) ソフトウェア技術者の養成（高度化、再教育など）。

ソフトウェアの質的転換を認識するために、ソフトウェア製品とは何か、ソフトウェア生産の特質とは何かをまず論ずる。次に、具体的な管理の対象とその技法に関して、ソフトウェア ライフサイクルに沿った管理、コスト、生産性、品質の管理について述べる。また、ソフトウェアの生産の手段は、実は人間の知的作業であるという特質を考慮して、人間的要因を分析整理し、技術者の管理と深い係わりをもつ教育に関するパネルディスカッションの内容をまとめて論じている。

前述したように、ソフトウェア生産の管理技術は、これから大いに研究され発展してゆくものである。本特集号が、わが国におけるこの技術の確立に対するきっかけとなってくれることを願う次第である。

最後に、この特集号を編集するにあたって、終始おしなめ協力をいただいたソフトウェア工学シンポジウムの発表者諸氏ならびにソフトウェア工学研究会の連絡委員の方々に深く感謝の意を捧げたい。

(昭和55年9月10日受付)

[†] 東京大学(理)情報科学科

^{††} 慶応義塾大学(工)数理工学科

^{†††} 慶応義塾大学情報科学研究所

^{††††} 協同システム(株)

* 情報処理学会：第2回ソフトウェア工学シンポジウム ソフトウェア製品生産管理予稿集、昭和54年12月